

女1 新しい先生

女2 知子

男1 洋輔

男2 内山田

女3 文子先生

顔

1

部屋がある。部屋の側面に不釣り合いなほど大きな窓がある。窓を挟んで部屋の中央の机に女1が座り、窓の外側に女1と同じ服を着た女（顔）が立っている。部屋にはほかに端にも机がひとつ。そのほかは本棚とベッドなど。どこかに簡易の黒板がある。女1は誰かを待っているのか落ち着きがない。黒板を見つけ、そこに描かれてある女の絵と、絵の女のものであろう名前（文子先生）を眺めている。

顔

（親譲りの見た目で、得ばかりしている。母親はまじめを絵にかいたような堅物教師で、私を見た目は、その母親にそっくりというわけだ。そのため、どうも母親と同じくまじめな堅物人間にちがいないと思われるらしく、ナイフとフォークを反対に持って食事をした時も誰にもなにもいわれなかった。これはあまりよい例えではないかもしれない。どうやら最初からまちがえてしまった。やはりはじまりのところはむずかしい。財布を拾って交番に届けたとき、お巡りさんに、これはあなたのような人が持つておくべきだといって、なぜだかそのまま返された。これはよい例えになるような気がする。財布には八万円入っていた。どうしたものかと思っただけで母親に相談したところ、やはり同じような経験をしたことがあるらしく、我々の外見が与える印象が警察をもってそう判断しからしめるのではないかと述べた。ようするにまじめな人間に対するご褒美だと思えばいい、ということだ。その八万円はその日のうちに競艇場ですっかり溶かしてしまった。やはり軍資金に余裕があるときは手堅く攻めるべきだったかもしれない。いつものように第一レースから勝負、3捲り456流しの中穴狙い一本やりで攻めてしまい、特別競走のずいぶん前に尽きてしまった。結局これもあまりよい例えにならないかかったかもしれないが、先に進もう。これもその母親の見た目のおかげで舞い込んできた話だ。母親の葬式の時に参列していた母の同僚の男から、ちょうどきみのような人を紹介してもらった。きみのような人とはどういう人かと尋ねたところ、見た目がそれな

りで、ちょうどよいのだと言われた。田舎に行ってもらわないといけないけど、家族もいなくなつたんだし、いつまでもぶらぶらと競艇通いしているよりはいいだろうといわれると反論もできず、見た目と違い頭のほうは母親と似ても似つかずではあるのだが、見た目がそれなりならば、それでよいとあらためて念を押され、まあ田舎の子供相手なら何とかなるだろうと、いわれるがままにやってきて驚いた。なんと相手は大人ではないか。しかし来てしまったてまえ、話がちがうとも言えず、ひとまず理事長、つまりこの仕事を紹介してくれた男が来るまで、差し当たって辞書で言葉を調べる係を務めている。）

いつのまにか女2が部屋に帰ってきて机に座っている。

女1 (女2に気づき)わ。

女2 ははは。お待たせしました。わかりましたか？

女1 いくつかわかりました。これは四十雀(しじゅうから)でした。

女2 しじゅうから？

女1 鳥の名前のようです。

女2 とりのなまえ。

女1 これは惻隠(そくいん)ですな

女2 そくいん？

女1 そくいん。

女2 そくいん、とは何ですか？

女1 同情するということのような意味でした。えー、斜めに置かれた残酷な鏡は惻隠の情を覚えるようになり、完全に消え去ったわけではないしろ、ですからえー、なんでしょうね？えーっと

女2 でこれは

女1 それはちよつと読み方が分からないので、調べようが分かりませんでした。

女2 えー

男2 帽子を手に持って入ってくる。

男1 おそくなりましてすみません。しかしやはり誰もいませんでしたね。

女1 え？

男1 あ、今、大丈夫でしたか？

女1 大丈夫です。あ、大丈夫ですかね？

女2 大丈夫です。

男2 庭のほうを一通り見て廻ったのですが、そんな人は誰もいませんでしたね。

女1 そうですか。

男1 黒い服を着た太った男ですよ。

女1 そうですね。まあ、そんな感じだったかもしれませんが。でも見たのは夜でしたし、はつきりとはわからないんですが。

男1 いやあ、そういうのはいませんでしたね。

女1 そうですか、やはり私の勘違いだったのかもしれませんが。すいませんお忙しいところ、ありがとうございます。

女2 ずいぶん遅かったですね、内山田さん。

男1 そうなんですよ、いちおう念のため、ロンドンの近くまで見て廻ったんですよ。

女1 ロンドン？

女2 パン屋です。

女1 ああ。

男1 いやあ、しかしませんでした。怪しそうな黒い服の太った男ですよ、ロンドンちかくで何人かに聞いたんですがそういうのは誰も見たことないと言っていましたね。

女2 でも見たのは夜でもんね。

女1 そうですね。

女2 昨日の夜ならさすがにもういないでしょう。

男1 いやあ、いませんでしたね。もっと早く言ってもらえれば夜のうちに捕まえたんですが。

女1 ありがとうございます。今度からそうします。

男1 何時ごろか覚えてますか？

女1 何時ごろでしょう？まだ寝るには少し早いかと思っておりましてので

男1 はいはいはい、じゃあ八時ごろ？

女1 え？いやもうすこし遅かったような

男1 九時ごろ？

女1 あー。

男1 九時十分ごろ？十五分ごろ？二十分？二十五分？二十六分？二十七分？

女1 二十、七分ごろでした？

男1 二十七分ごろ？

女1 まちがいありません。

男2 わかりました。では今日は九時二十七分ごろになりましたら庭のほうを見て廻るよ
うにいたします。

女1 あ、いや結構です。見まちがえたのかもしれないし。

男1 しかし安心できないでしょう？

女1 それはそうなんです。

男1 では今夜は内山田がこの部屋で朝まで見張りをします。どうぞ安心して寝てください

い。

女1 え、この部屋で、ですか？

男1 ええ、たっぷり寝てください。

女1 あ、いや。それはさすがにちよつと、困ります。

男1 え、そうですか。それはいったいなぜ？

女1 人がいるとなると私も落ち着いて眠れませんし、えーあの。

男1 内山田です。

女1 内山田さんも眠れないでしょう？

男1 内山田は大丈夫ですので、気になさらずたっぷり寝てください。眠れなかったんでしよう？もちろんかえって気を使わせてしまってしまうのであれば、従いますが。

女1 もしなにかありましたら、お呼びしますのです。とりあえず今夜のところは大丈夫です。内山田さんにはしっかり確認していただいたので、安心しました。しかしやはり窓にはカーテンがあつたほうがありがたいです。

男1 カーテンですか？

女1 夜はやはり落ち着かないですし。

男1 この窓にカーテンですか？わかりました。用意いたします。

女1 ありがとうございます。

男1 はい。

女2 珈琲は？

男1 珈琲？

女2 内山田さん、珈琲を持ってくるのではなかったですか？

男1 おお、そうでした。ではこちらに持つてくるということではないですかね？

女1 ああ、そうです。こちらのほうが読書にはよいそうです。

男1 わかりました。ではこちらに珈琲のほうを持つてきましょう。あ、帽子帽子、では持つてきましょう。

女1 恐れ入ります。

男2 でていく。

女1 思ったより大騒ぎになってしまいました、すみません。

女2 気にしないでください。窓にはカーテンがないといけません。夜に窓から黒い太った男は誰だつて怖いです。

女1 そうですよね。

女2 それに気にする必要ありませんよ、内山田さんのことなら。どうせ暇ですから。

女1 そうですか。いや、やはり謝らなければいけません。黒い男というのはほんとと見えないのです。

女2 え嘘なんですか？

女1 そうですね、嘘をつくつもりはなかったんですが、なぜか話しているうちに嘘をつくことになってしまいました。

女2 まちがいありません、とはつきり言っていましたよ。

女1 そうですよ、なんでそんなことを言ったのか自分でもよくわかりませんが、そうなってしまいました。部屋がどうにも明るくて、それでその、カーテンがあればいいの
にと思っ
てその話をしたのですが、いつのまにか窓の外に人がいるという話になって
しまい、どんな男か聞かれて
いるうちになぜかそう言っ
てしまいました。謝ります。

女2 そうだったんですか、でも大丈夫です。どうせやることないですから内山田さん。

女1 いやしかし、誤解を解かないと。

女2 かえって仕事ができたのでうれいんじゃないですか。

女1 とにかくすぐに謝ります。

女2 そうですか。この部屋はずっとカーテンがありませんでした。だいぶ印象が変わりま
すよね。

女1 そうなんですか、前の先生は、明るくても眠れる人だったんですね。

女2 あ、また読めない漢字がありました。これなんですか？

女1 これは：なんて読むんでしょう？ちょっと待ってください、調べます。

女2 はい。ピザが名物です。

女1 え？

女2 ロンドン。

女1 ロンドン？あパン屋。

女2 はい。今朝食べたのがそうです。ピザとラザーニアがまあまあです。

女1 ああ、そうですか。

女2 はい。

女1 ロンドン。

女2 あとスバゲッティトーストとかいうよくわからないパンもあります。私は好きでは
ありませんが、内山田さんはよく食べてます。

女1 それは、ロンドンというよりもあれですね。その、ロンドンじゃないほうの名前のほ
うがいいような店ですね。

女2 ロンドンじゃないほうというと？

女1 え、ありますよね、ロンドンじゃないほう。あのほら。

女2 はい？

女1 あれ、まちがえたかな。いや、まあいいです。

女2 あまり似合っていないですね。

女1 この服ですか？え、そうですか？

女2 似合っていないです。

女1 そうですか。まあしかしこの服を着てくださいということなので。そうですか、似合っていないですか、仕方ないです。あの、前の先生は似合っていましたか？

女2 文子先生ですか？

女1 はい。

女2 そうですね。文子先生は、あんまり似合っていないませんでした。

女1 あ、そうなんですか。

男2、お茶とお菓子をもって入ってくる

男1 お待たせしました。どうぞ。それとこれ、もらい物なんですすがよかったです。

女1 これは、私が持ってきたものです。

男1 え？

女1 私が昨日。

男1 そうでした。すみません。

女1 いえ。でもお気になさらず。

男1 そうですか。どうぞ。お口に合うとよいのですが。

女1 え？ああ。

男1 内山田も休憩してよいですか？ここで。

女1 え？

男1 ご一緒に。

女1 いや、私たちは休憩しているわけではありませんが。

男1 え？そうなんですか。

女1 あのいまは勉強中なので。内山田さんはお先にどうぞ、おまんじゅうもせっかく三つあることですし。

男1 すいません。気を使わせてしまいました。では勉強中、お邪魔します。

女1 あの、この漢字なんて読むかわかりますか？

男1 わかりませんね。私はちょっと漢字のほうは。

女1 はあ。

女1、中央の机に戻り、辞書を開いて漢字を調べだす。

男1 この島はいかがですか？

女1 (辞書で調べる手を止めて) まだ来たばかりなので、知らないことばかりですが、よいところだと思います。(再開)

男1 どのあたりが？

女1 (辞書で調べる手を止めて) そうですね。すみません、まだよくわかりません。(再

開)

男1 なにもないので、不便に感じるかもしれませんがすぐに慣れますよ。前の先生もそうでしたから。お聞きになったかもしれないませんが旦那様が、子供は田舎で育てないといけないという考え方でして、わざわざここに家を買って、お子さんたちを育てているのです。大変すばらしい考え方だと思います。(再開)

女1 (辞書で調べる手を止めて) はい、その話は伺いました。私もそう思います。

男1 おかげで内山田も

女2 もう。(本を奪い続を読み始める)

男1 このような立派な仕事に就くことができませんでした。以前は洗濯屋をしておりましたが、なにぶんこの島は水が足りず、すぐに出なくなるので、海水で洗っていたのですがばれてしまっしまいました、それ以来、注文がばったり来なくなってしまう困っていたところ、声をかけられたというわけです。旦那様はよくこの島に自転車に乗りに来ておりまして、たまたま私とぶつかって大けがをしたものですから、それが縁です。いまでもときどき激しく痛みますが、仕事のほうは問題ありません。

女1 学校にも自転車 came てましたよ、理事長。自転車に乗るのにちよいどいい島だから、きみも乗るといい、自転車を買ってあげるのでそうしなさいといわれました。

女2 また買う気だな。

女1 え？

男1 もちろんそうでしょう。

女2 ここにはもうたくさんありますよ、自転車。十台以上。

女1 え、そうなんですか？

女2 文字先生のもまだ二台残っています。持ち主が分からない自転車も何台かあります。

男1 えどれですか？

女2 赤いやつと黄色いやつ。

男1 それは来客用です。黄色いやつは洋輔くんの昔のやつでしょう。

女2 洋輔の昔のやつはカゴが横についてるやつだよ。

男1 あれ？そうか。とにかく自転車はいっぱいあります。

女1 あそうなんですか。何にしろそんなことをお話しされてました。人にプレゼントする自転車を選んでいるときはほんとうに楽しいそうです。

男1 内山田の話も出ましたか？

女1 そうですね。いや、そのときは出ませんでした。

女2 どうさん、学校ではどんな風でした？

女1 あ、そうですね。直接はあまり知らないんですが、卒業式とかで自転車の話ばかりをする人という印象でした。うちの母が、その理事長の学校に勤めていたので、母からは時々話を聞くことはありましたが、どんな話だったかあまり覚えていません。母の葬式の際に、来ていただいて、その時も自転車 came られました。

女2 え、お葬式にも。

女1 はあ、でもちゃんと黒い自転車でしたよ。それでこちらのお話をいただいて、お世話になることになりました。そのときはお子さんはおふたりと聞いておりましたが、おひとりとは思いませんでした。

男1 そうですか。

女1 はい。

男1 内山田の話は出ませんでしたか。

女1 あ、はあ。しかし私でほんとうに務まるのでしょうか？私は人に教えたこともないし、もうすこし小さいお子さんだと思っていたので、何を教えたらいいのかわからないんですが、大丈夫でしょうか？

男1 もちろんです。とても似合っただけです。

女1 え、あれですか？

男1 とてもいいです。

女1 さきほど、あの、あまり似合っていないといわれました。

男1 え？しかしそんなことはありませんよ。とてもよく似合っただけです。旦那様もさぞかし満足されると思います。こちらに来ることがあればですが。いちおう私が選んだものです。

女1 え、あそうなんですか。

男1 旦那様はこういうことに大変うるさい方なので、かなり時間をかけて選びました。ブエノスアイレスでいちばんよい服です。

女1 ブエノスアイレス？

女2 洋服屋です。

女1 ああ。

男1 私の服もブエノスアイレスのものです。島には洋服屋が三軒あるのですが、ブエノスアイレスはそのうち、いちばんよい店です。つまり一番良い店の一番良い服というわけです。店のおやじも無口で安心できます。源太郎です。内山田は源太郎と同級生なのでツケがききますし、あいつは流行にも詳しいんです。若い女性の好きなバンタロンも数多くそろっておりますので新しい先生もぜひ、服を買ってあげてください。喜ぶと思います。

女1 あ、それはぜひ。

男1 その服も源太郎に選んでもらったのです。ははは、(まんじゅうを食べながら)そして内山田のこれも。まさに源太郎のセンスです。

女1 わかりました。あの、

男1 え？あ、ほんとだ。内山田がまんじゅうを三つとも食べてしまいました。

女1 あいや、私はいいんですが。

男1 (食べながら) どうでしょう。あ、大丈夫です。じつは六つ入りだったのであと三つあ

るんですよ。

女1 それは、ええ、それは知っています。

男1 持ってきますね。

女1 あ、すいません。

男2 でていく。

女2 ふふふふ。

女1 え？

女2 謝れなかったですね。

女1 なにがでしたっけ？

女2 え、あの黒い男の話。

女1 あ、そうでした。

女2 漢字のほうはどうですか。

女1 あ、まだ調べていませんでした。

女2 もういいです。先に進んでしまっていましたから。

女1 そうですね。

女2 今のは内山田さんの口癖の真似です。

女1 あ。

女2 この島の言葉だと思いましたか？

女1 あ。いや、そうですね。それは小説ですか？

女2 そうですね。

女1 むずかしそうな小説ですね。

女2 むずかしいかどうかわかりませんが、とにかく私にはむずかしいです。でも私の大切な本です。文子先生にもらいました。これのつづきがまだあります。長いんです。文子先生がいなくなってからずっと一人で読んでいたので、新しい先生が来てくれてうれしいです。

女1 そうですね。あの、子供は田舎で育ったほうがいいというのは、知子ちゃんこのことですよ？

女2 ああ。私は子供ではありません。来週になれば洋輔が帰ってきます。

女1 洋輔？

女2 弟です。新しい先生は、洋輔のほうを教えるために来たんだと思います。私は大人ですが、洋輔は子供です。夏休みになったら寄宿舎からここに帰ってくるようになっているので、来週には帰ってくると思います。普段は山奥の学校の寮に住んでいるんですけど、夏休みと春休みになったらここに来るんです。

女1 そうですね、なるほど。それでは私は少し早く来すぎてしまったんですね。じゃあ、

もうすぐお帰りになるんですか。洋輔くんですね。

女2 洋輔です。

女1 楽しみですね。いつ以来になるんですか？

女2 いえ、できれば私は帰ってきてほしくないと思ってます。洋輔は、なんとか駄目なやつなので。

女1 駄目なやつ？

女2 はい。

女1 駄目なやつとは？

女2 駄目なやつとは駄目なやつです。ここだけの話ですが、洋輔は文子先生と出来てました。

女1 え？

女2 そうなんです。出来てたんです。いつもこの部屋に何時間も鍵をかけて二人っきりで閉じこもってました。ときどきふたりでこそそこそこかへ行っていましたし。

女1 子供ですよね？

女2 そうです、でもそうなのです。

女1 そんな話、私がいけないでしょうか？

女2 いいんです、みんな知ってますから。

女1 え、ここだけの話とは。

女2 寄宿舎に入ったので、もしかしたらちよつとましになっているかもしれませんが。文子先生といるとあいつにはよくないということ、内山田さんがとうさんに相談してしつめの厳しい寄宿舎に無理やり入れたんですよ。あの時は大変でしたが、結局とうさんは忙しいとかで、こっちには来てくれませんでした。内山田さんはずつと手紙でやり取りしてましたが、返事はぜんぜん帰ってきませんでした。かわいそうでした。あのひと、あんまり字が書けないのに。たぶん内山田さんもあまり帰ってほしくないと思ってるはず。新しい先生も気を付けてください。寄宿舎は厳しいところらしいのでちよつとましになっているのかもしれない。でも、もともとあいつはすごく駄目なやつなのでここに帰ってきたらすぐに元の駄目なやつに戻ると思えます。気を付けてください。

女1 気を付ける？

女2 いちど私はふたりが出かけたとき、後をつけてみたことがあるんです。でも、残念ながら見失いました。あいつはそういうのは実にうまいことやるのです。わざわざ入り組んだ道を通ってふつと消えるのです。あとでどこにいったのか聞いたら、ストックホルムに行っただけだと言っていました。

女1 ストックホルム？

女2 おそば屋さんです。ストックホルムでおそばを食べてただけだと言いましたが、でもそれは嘘なんです。私にはすぐにわかりました。なぜならその日はお昼にもおそばを

食べたんです。内山田さんが用意してくれたおそばです。昼におそばを食べた人が夜にわざわざおそばを食べに出かけるでしょうか？外に？誰もそんなことはしません。昼におそばを食べた人は夜に外でおそばなんか食べません。そんなことは誰にだってわかることです。そうでしょうか？

女1 え？まあ、そうですね。

女2 サンパウロです。サンパウロに行つてたに決まっています。ストックホルムなんかじゃない。私は子供ではありません。だからサンパウロがどういふところか大体想像がつきません。

女1 それでどういふところなんですか？

女2 そうでしょうか？そういうところなんです。入ったことはありませんが外から見ただけで、中がどうなっているかはすぐにわかります。そうでしょうか？わかりますよね？

女1 それはあれですね。おそばというよりもあれですね、えーその、つまり、わたしやあなたのそばがよいということですね。

女2 というと？

女1 え、ありますよね、なにかそんな。

女2 はい？

女1 あれ、またまちがえたかな。いや、しかし洋輔くんはまだ小さいんですね。それなら前の先生のほうにも問題があるんじゃないでしょうか？

女2 たしかにそうです。文子先生も、洋輔のことは甘やかしてばかりで、よくありませんでした。何か弱みを握られていたにちがいありません。とにかく乱暴者でしたから。寄宿舎に入るときも大暴れして、内山田さんひどく殴られました。さきほど、とうさんとぶつかったときのけがが時々痛むと言っていましたけど、ちがうんです。洋輔に殴られたところが痛むんだと思います。とにかく機嫌が悪くなるとすぐに暴れるんです。本当に駄目なやつなんです。それにあいつは武器を持ってますからね。鉄でできた鋭い武器です。ポケットに隠しているんですが、いつも持っていて怖いんです。どうですか？怖いですよ？ちなみに洋輔は、文子先生が死んだことはまだ知らないと思います。

女1 え？

女2 この部屋、片づけてなかったのはそのためです。内山田さんは片づけようとしたんですが、私が、文子先生が使ってたそのままにしておいてほしいとお願ひしました。昨日ここに来た時、飲みかけの珈琲が置いてあったでしょう？あれは私の作戦なんです。あいつはこっそり寄宿舎を抜け出して帰ってくるかもしれないので、そのときもまだ文子先生がいると思わせるために、毎日私が珈琲をいれておいたのです。それくらい用心してないと、文子先生がいなくなったことに気づいて暴れだしたら大変ですからね。でもすぐに気づくでしょうね。

女1 え。

女2 新しい先生を見つけたら。

女1 それはそうですね。私がいるとなると、どうしますかね。

女2 まず暴れると思います。

女1 え。

女2 ものすごく。怖いですか？

女1 怖いということはまだわからないんですが。

女2 なんですか？

女1 あの、やはり理事長が来られたら、ご相談します。

女2 なにを？

女1 私はなにかこう、勉強を教えるという人間ではないので、あまりふさわしくないかな
と思ひまして、おそらくこういったことにもっと向いている人がいるんじゃないかな
と思うので。そもそも私には教えるものがないので。小さなお子さんの面倒を見てくれ
という話だったので引き受けただけなんです。なので聞いていたこととちよつと違
いますので、私では務まらないかと思ひます。

女2 守りますよ、私が。新しい先生を。

女1 守る？

女2 はい。だからいてください。新しい先生も私を守ってください。

女1 守る？え、なにかから？

女2 お願いします。その代わり、洋輔から新しい先生を守りますから。洋輔をこの部屋に
は入れさせたりしませんから。

女1 前の先生は、

女2 文子先生。

女1 文子先生はどうして亡くなられたんですか？

女2 海でおぼれて死にました。台風の日、乗っていたフェリーが転覆してしまつたんで
す。このあたりの潮はすごく速いのです。静かに見えますが。

女1 そうですか。

女2 文子先生のこととはあまり好きにはなれませんでした。

女1 そうですか。

女2 はい。

女1 それはどうして？

女2 文子先生が私のことを嫌いだったからです。できればいなくなって洋輔だけの先生
になりたかつたからだと思います。だから新しい先生が来てともとうれしいです。今
日は終わりにしましょう？

女1 え？

女2 もう夜ですし。明日までに考えておいてください。昼間の漢字もいっしょに。明日き
きます。私はおなかがすきました。もうすぐごはんです。さっきの漢字は明日までに調

べといてください。

いつのまにか夜になっている。

女1 え？ああ。わかりました。

女2 ではまたあした、新しい先生。

女2 出ていく。女1、一人になった部屋で黒板に再び目が留まり、絵を勢いよく消し始め、消した終わり次第、何かの平面図を書き始める。

2

女1、平面図を書き終わり、部屋の中央に持ってくる。中央の机には男1と女2が座っている。ベッドの上に帽子と小さな鞆が置いてある。

女1 このように、この競艇場は第一マークの振りが小さいので、インコースを走る選手がスタート後もまっすぐ走れば第一マークに到達することができます。そうすると、斜行せずに回りシロを持ってターンできるので、そのまま逃げが決まりやすくなります。簡単に言えば一号艇の選手がそれなりの人なら素直に①アタマで予想することをお勧めします。

男1 ①アタマ？

女1 一号艇を軸にして、予想を立てるということですね。

男1 なるほど。それなりとはなんですか？

女1 それなりというのは、たとえばターンのうまさとかですかね、あと地元の選手かどうかですかね、地元選手なら地の利というのもあります。競艇場にはそれぞれ特徴がありますのでその特徴をわかっていると有利になりますよね。たとえば、私はほかの競艇場に行ったことないので、他とどれくらい違うのかよく知らないんですが、ここはほかより第一マークとスクリーンの距離も狭いと言われています。だから、減速しつつ小回りでターンする技術が求められます。そういう場所の特徴をよく知って、そこでのレース経験の多い地元選手のほうが有利になりますね。ここは淡水ですのでモーターの性能の差が出やすい競艇場です。淡水というのはわかりますか？

男1 たんすい？

女1 淡水とは海水じゃないほうです。プールと海の違いです。舟が浮きやすいかどうかの違いがあるようです。淡水なら浮きにくいので、モーターの性能の差が出やすいということです。これ（黒板）もう消してもいいですか？

女2 ちょっと待ってください。（板書をノートに取る）

女1 はい。

女2 どうぞ。

顔 (私はいったい何を教えているのだろう。という気持ちと同時に、何か教えることがあったのだという気持ちが入り混じって落ち着かない。少なくとも分厚い辞書をめくる係よりは安心する。窓は相変わらずカーテンがついておらず、すぐに来ると言っていた理事長は三週間たっても何の連絡もなく、手紙を二通ほど書いて送ったが届いているかどうかもわからない。すこしずつこの島の生活にはなじんできたが私は相変わらず新しい先生と呼ばれている。)

女1、声(顔)のするほうに誰かみえるのか、窓の外のほうを気にする。

男1 だいたいわかりました。

女1 え？

男1 内山田はもういますすぐ勝てそうです。これはまだ続きがあるんですか？

女1 まだまだありますよ。

男1 そうですか。しかしそうかもしれません、だいたいわかりました。内山田にはもう十分です。

女2 でもこれだけ知ってる新しい先生でも、ぜんぜん勝てないんだから。

女1 ぜんぜんというわけではありません。

男1 内山田はちがうと思いますね。

女2 でも勝ったのって最初だけなんだよ。

女1 最初だけじゃありません。

男1 それは向いてないからです。残念ながら向き不向きがありますので。新しい先生は向いてないのです。

女1 それはあの、まあそうかもしれませんが。

女2 内山田さんだって向いてるかどうかわからないじゃない。

男1 わかりますよ。新しい先生はあれですか？一発大物を狙うやり方ですか？

女1 え、そうですね。そうかもしれません。

男1 ほら。これが駄目なんです。だから勝てないんです。

女1 だから勝てないというわけではあります。

女2 新しい先生だって、いつもそんな馬鹿みたいに一発大物ばかり狙わないって。

女1 いやそれはいつもそうなんですが。

男1 予感がするんですよ、内山田はやれるぞって。

女2 どうせ新しい先生みたいに勝てなくて泣きながら家に帰ることになるよ。

男1 内山田は泣かないでしょうね。

女1 私も泣いておりませんが。

女2 そして布団の中で二度としないと誓うことになるのよ。

男1 え、やめたんですか？

女1 はい、もうやめました。布団の中で誓ってはいいですが。

男1 もつたいない。やりましようよ。

女1 いえ、もう二度としないことに決めましたから。

男1 内山田が勝つてるところを見たらまたやりたくありませんよ。どうします。

女1 大丈夫です。やりません。でも知りたいことがあつたら何でも教えますよ。

男1 それはもうたくさんです。だいたいわかりましたから。

女1、窓の外を見るが誰もいない。

女2 質問いいですか？

女1 どうぞ。

女2 新しい先生は、競艇、誰に教わったんですか？

女1 別に誰というわけじゃありません。

女2 なるほど。男だな。

男1 なるほど。

女1 まあ男か女かといわれたらそうですが。ほかに質問はありますか？

男1 大勝ちというどれくらいになるんですか？

女1 それは場合によりますのでわかりません。

男1 新しい先生の場合は？

女1 忘れましたが、最初に行ったときに大勝ちしましたね。お寿司屋をその夜は三軒行き
ました。

男2 え、お寿司ばかり？

女1 そうですね。

男1 お寿司好きなんですね。港のほうに一軒ありますよ。

女1 ケンタッキーでしょう。

男1 ケンタッキーです。

女1 もう行きました。

男1 え、いつ？

女1 三日前のお昼です。内山田さんが古傷がうずいて寝込んでいた時です。

男1 ああ、あの日ですか。どうでしたか、ケンタッキーは。

女1 そうですね、まあ、なんというか、都会的ではありませんでしたので戸惑いましたが
まあまあでした。

男1 都会的でないと。

女1 なんでしょう？

女2 田舎的だということですね。

女1 そうかな。

男1 伝えときます。

女1 それはやめてください。でも名前は変えたほうがいいと思います。お寿司を食べる気分にはなりませんでしたので。

男1 え、それはどうして？あ、もうこんな時間か。

女2 どうした？

男1 内山田にはちょっと予定がありました。これからブエノスアイレスに行かないといけません。(帽子をかぶり、鞆を手に持つ)

女1 ブエノスアイレスというところでしたっけ？

男1 会合です。黒い太った男の件で集まるんです。

女1 黒い男の件？

男1 新しい先生が見たという。

女1 え？あそうなんですか。

男1 みんなで話し合うことになりました。

女1 みんなで？

男1 はい。この島の一大事ですからね。

女1 ああ。

男1 はい。まもなく解決できると思います。けっこうな人数が集まると聞いてますし、なんと鉄之助も来て、力を貸してくれるそうですので。

女1 鉄之助？

男1 わざわざ休みを取って広島から来てくれるそうです。これで百人力ですな。本当の会合は日曜日になるんですが、今日はその準備の会合です。なにしろ日曜日には島の外からも人が集まるみたいなので、いろいろ準備がいるんですよ。それでは失礼します。良
い知らせを持って帰りますので。

男1 去る

女2 大げさになってますねよ。

女1 そうですね。

女2 広島から鉄之助という人も来るらしいですよ。

女1 誰ですか？

女2 知りません。

女1 広島というのは？

女2 知りませんか？本州にある街です。

女1 あ、そっちの広島なら知っています。

女2 やはり新しい先生があの時さっさと謝っておけば。

女1 そうなんです、実はいたんです。ああ。

女2 え？

女1 窓の向こうに、人が。

女2 ほんとですか？

女1 はい。太つてもなくて男でもありませんでしたが、黒い服を着てました。

女2 いつごろですか？

女1 昨日です、昨日の夜です。庭に立って上の階のほうをずっと見ていました。あの人は
文字先生ではないかと思えます。

女2 ほんとですか？

女1 まちがいありません。私と同じ服を着ていました。

女2 そうですか。

女1 はい。

女2 どのへんでした？

女1 あのあたりです。

女2 上というと洋輔の部屋のほうですか？

女1 そう思います。落ち着きがなく、なにか不安そうな顔をしていたので不思議と怖くは
ありませんでした。十分くらいですかね、何か返事のようなものを待っているような感
じでしたが、しばらくすると消えていきました。

女2 そうですか。

女1 今度はほんとの話です。

女2 お。では謝らなくて正解でしたね。

女1 そうですね。

女2 明日帰ってくるのが分かったんでしよう。あれか、洋輔の部屋を掃除したりしてたか
らだ。それをどこかで隠れて見ていたんだ。

女1 隠れて見る必要があるんですかね？ほらそういう人はいつもは見えないわけだから。

女2 じゃあ、やっぱり匂いだな。何か返事のようなものを待っているような感じだったん
ですよ？

女1 ええ、そう見えました。

女2 よっぽど会いたいんですよ、洋輔に。注意しないといかんですね。相手は人間じゃな
いとしても。あいつが帰ってくる前に何とかしないといかんです。今夜も来るかもしれ
ません。

女1 そうかもしれませんが、特に困ることをしているわけではないので。

女2 まかせてください。私は幽霊を退治したことがあるんです。

女1 ほんとですか？

女2 はい。あれは幽霊でした。私の掘った落とし穴に落ちてしゅわしゅわと消えていきま

した。

女1 しゅわしゅわと？

女2 しゅわしゅわと。

女1 穴に落ちた？

女2 はい。いやしゅわしゅわと落ちたんじゃありません、落ちてしゅわしゅわです。

女1 でも足がなかったんじゃなかったでしたっけ、そういう人は。

女2 ふふふふ、それはまちがいです。ありますよ。

女1 うん？

女2 いや新しい先生は、ここにいてください。

女1 はい。

女2 ちゃんと守ってあげますから、新しい先生。

女1 はあ。

女2 出ていく。

女1 (窓の外に) その辺です。

女1 窓の外の女2の作業を見ている。女3登場し、女1に重なり、同じく窓の外を見ている。女1、女3に気づく、

女1 あれ？

女3 ？

女1 文子先生ですか？

女3 ？

女1 はじめまして、私は、その、新しい先生です。

女3 ？

女1 いや、新しい先生って

女3 ？

女1 なにが、見えるんです？

女3 ？

女1 文子先生。ですよね？

男1、登場

女1 あ、内山田さん。

男1 珈琲淹れました。

女1 え？あ、ありがとうございます。あの、
男1 あれ？電気付けないんですか？
女1 あそうですね。あの、早かったんですね。
女3 だめだめ、暗くしておいて。
男1 そうですか。暗いほうがいいか、夜は。
女1 え？
男1 (珈琲を飲もうとして) 何か見えるの？
女3 だめだめ。動くな。這ったままこっち来れる？
男1 這ったまま。
女3 うん。
男1 どうしました？
女1 あの。
女3 知子ちゃんが、庭に隠れてこの部屋を見張ってる。見つからないようにのぞける？
男1 え？(こうーひーを一気に飲み、熱さに苦しみつつ這いながら窓のところに行き、女3のスカートに入ろうとする)
女3 そこは窓じゃないよ。
男1 あ、まちがえました。
女3 調子に乗るんじゃないよ内山田。
男1 調子に乗りました。
女3 動くな。
男1 え？
女3 ずっとこっち見てるから。
男1 わかりました。
女3 買ってきてくれた？
男1 禁煙。パイポ？
女3 うん。
男1 買ってきました。迷ったんで結局二種類買ってきたよ。
女3 二種類？
男1 黄色と青。
女3 どっちでもいいよ。好みなんかないからこんなもん。(啜えて) ふー
女1 あの、内山田さん。
女3 いる？
男1 じゃあもらおうかな。(啜えて) ふー。やめれそうですか？
女3 やめなきゃ。人生の転機なんだから。ここで完全にやめれないと、せつかくのお話が流れちゃう。
男1 源太郎が知ったら泣くな。これ源太郎にもらいましたよ。

女3 なにこれ？

男3 あけてくださいよ。文子先生のお好きなものですよ。

女3 (あけて) ストッキング。

男1 高級ストッキングだって。

女3 うん。

男1 どうですか、源太郎の選んだものは。

女3 まあ嫌いじゃない。

女1、行き場所を失い、ベッドに横たわる。

男1 これ履いてまた店に来てくれって言ってましたよ。

女3 どうせ触りたいたいでしょ。行くたびに採寸の必要があるとか言って、すぐに触りたがるんだから。

男1 ははは。

女3 全然相性よくないな。珈琲と禁煙パイポ。

男1 内山田は気になりませんでした。

女3 もう飲んだの？

男1 飲み終わりました。

女3 あんたの悪いところだ⁺。なんでも急いじゃう。もっとゆっくり飲んだり食べたりして、もっと味わわなくちゃ。

男1 そうかもしれません。

女3 早くやりたいのね。

男1 内山田は、そうかもしれません。

女3 あの子があそこにいるうちはダメだよ。

男1 それなら仕方ありません。しかし何を見張っているのですか知子ちゃんは。

女3 さあ。このあいだ、ずっと尾行されてた。

男1 尾行？

女3 うん。気づいてないふりするのが大変だった。おもしろくなっていろいろ歩き回ったけど、ずっとついてきてきたよ。フロリダで買い物してからそのあと、わざわざ造船所のほう回って帰ってきたけど、そのあいだずっと隠れてついてきてた。

男1 それはすごいな。でもなんで。

女3 私のこと好きなんじゃない？

男1 それはわかりますが。

女3 小説家になりたいみたい。

男1 そんな話を、知子ちゃんが。

女3 話はしてない。短冊に書いてあった。

男1 短冊？
女3 七夕の。だからいっぱい小説を読んで勉強するんだって。
男1 それも短冊で？
女3 それは寝言で。
男1 なにかと秘密を持ってない性分だな。
女3 でも本人は秘密のつもりだから知らないふりしてあげて。
男1 わかりました。いなくなったらすぐに教えてくださいよ。
女3 さあ、どうかな。
男1 だいぶ元気になったと思ってたんですけどね、知子ちゃん。
女3 うん。あの子はね、ちょっと。
男1 そうですか。
女3 洋輔だけでも一人前にしたんだから、褒めてもらいたいわ。
男1 褒めてもらえますよ。
女3 早く褒めに来てもらいたいもんだわ。
男1 そのうち褒めに来てくれますよ。
女3 いつよ？
男1 さあ。あの子の読んでる本はなんていう本なんですか？
女3 「失われた時を求めて」って小説。知ってる？
男1 わかりませんね。内山田はちょっと小説のほうは。

女1、ベッドから起き上がり、中央の机に歩き出す。机の上に置いてあった本をみつけ、タイトル（失われた時を求めて）を眺めている。

女3 だと思った。
男1 ずっとあれ読んでますね、知子ちゃん。
女3 そうね、気に入ったかもしれないね。
男1 どんな小説なんですか？
女3 知らない。
男1 へ？
女3 どんな小説かは知らない。ものすごく長い小説ってことだけ。誰も読み終えたことない小説。
男1 誰も読み終えたことないって嘘でしょ。
女3 嘘かもしれない。でも理事長がそう言ってた。何冊もあっておき場所もなかったから知子ちゃんに上げたら、読み始めててびっくりした。
男1 いつも持ってますよ。
女3 もしかしたらあの子が世界で初めて読み終えるかもしれないね。このままいけば。

男1 そうかもしれないですね。

女3 それか、あの小説の中で一生を終えるかもね。読み終えることなく。

女1、椅子に座り、本（失われた時を求めて）を読み始める。

男1 似てるって言ってなかったですか？

女3 え？

男1 先生と知子ちゃん。

女3 そっくりよ。もしかしたら私も何かの小説の中にいたのかもしれない。でももうこれ以上、小説の中にはいない。

男1 決まったんですか？

女3 なかが？

男1 日取りは。

女3 まだ決まってるじゃないけど、たぶん来月。

男1 どんな男で？

女3 写真しか見てない。けど冴えない男。年収はなかなか。子供一人。

男1 子供一人？

女3 高校生かな。とにかくたばこ嫌いのなよつとした男。でもケンタッキーの婆さんの知り合いにしちゃ、これ以上望めない男よ。もうあれこれいってられないんだからこっちも。

男1 内山田はさみしくなるかもしれません。

女3 すぐに来るわよ、新しい先生が。

男1 そうだといいのですが。源太郎のところについてお見合い用にびつたりの服を用意してもらいましょう。

女3 人生の転機なのよ。百貨店に行くに決まってるじゃない百貨店に。

男1 ブエノスアイレスじゃだめですか？

女3 失敗するわけにはいかないの。それにあそこの服を着ると運が悪くなるような気がする。

男1 そんなことないでしょ。

女3 最近何かそんな気がするの。

男1 なかが？

女3 ずっと考えてたのよ。何が私の人生の運を奪っていくのかって。もしかしたらこれじゃないかなってそんな気がするの。源太郎にもらった服を着てるとき、タダだから得してるように最初は思ってたんだけど、そうじゃないんじゃないかなって、得してるように見えることってほんととは損してるんじゃないかなって、そんなこと考えたことない？

男1 内山田はありませんね。

女3 試しに今までもらったものも思い切って全部捨てることに決めた。

男1 ほんとですか？

女3 うん。

男1 それも？

女3 もちろん。でも一回くらいは使おうかな。どうしよう、迷うわ。いやこれか、こういう迷いかたが運を奪っていくのか？よし、思い切って捨てよう。迷ってる場合じゃない。人生の転機なんだから。

男1 その服も捨てられないでしょ。旦那様が来た時に、その服じゃなかったら。

女3 来ないじゃない。一度も来たことないじゃない。

男1 文子先生が最後ということになるなら来るかもしれないですよ。

女3 もう八年になるのよ。八年間ずっと、そのうちそのうちって、いつ来るのよ。最後だからって来ないわよ。

男1 もう八年になりますか。味わいすぎましたね、この島を。

女3 え？

男1 先生の悪いところだ。

女3 (啞えていた禁煙パイポを男1に押し付ける)

男1 熱、くない。

女3 私の八年はね、ただの八年じゃないの。内山田の五十年か、それ以上に長いよ。

男1 わかりますよ。

女3 長かった。でもまだ安心できない。何があるかわからないからね。すべてが決まるまでは、注意しないと。私の運を奪うものから私を守らないと。

男1 履いてくださいよ。

女3 ストッキング。

男1 はい。

女3 いま？

男1 いまです。そのあとすぐに捨てますから。

女3 いいよ。静かにして。

男1 どうしたんですか？

女3 聞こえない？

男1 なにがです？

女3 階段を上がっているのよ。

男1 知子ちゃん？

女3 音を出さないようにゆっくり上がろうとするもんだからそのたびに、階段がきしむ

音がするのよ。ほんとにゆっくり。次にきしむのを予想するんだけどいつも外れるの。

そのうちとうとうとしてしまっって、またきしむ音で目が覚める。

男1 聞こえないですね。

女3 急がないで。

男1 はあ。

女3 味わうのよ、次に階段がきしむまでの時間を。

男1 はあ。

女3 ほら、もうすぐ。聞こえた？

男1 聞こえませんでした。

女3 え、うそ？

男1 ほんとにいるんですか？

女3 私ね、わかるような気がするのよ。あの子の気持ち。世の中で一人ぼっちで、みんな好き合ってるような気がするけど、そうじゃない。ほんとはみんな誰も他の人のことなんか好きじゃない。それはいつもは隠してあるけれど、自分にはそれに気づく力があるんだって、いまあの子は信じてる。それを確かめることができたら、一人ぼっちなのは自分だけじゃないって思うことができる。いま周りにいるのは仮の友達でいつか本当の友達に会えると思ってるけど、そんなことはない。結局この人たちといつまでもいっしょにいることになるのだから、いまあの子はそう思ってる。そのことに気づいてるのは自分一人なんだってそう思ってる。

男1 それは、短冊に書いてあったんで？

女3 私ね、内山田とやっていると、ほかの人のこと想像しながらしてる。気づいてた？

男1 え、うそ。だれ？

女3 それは言わない。

男1 え、うそ。

3

誰かがしばらくノックをする音が続いている。中央の机に本(失われた時を求めて)を読みながら寝てしまった女1がようやくそれに気づき、よだれを拭きながら返事をする。

女1 あ、はい。

男2 入ってくる。

男2 今よかったですか？

女1 大丈夫です。

男2 入っていいですか？

女1 どうぞ。

女1、慌てて机の上のものを片づけている途中で、男2が、奥の机の上のペン立てに彫刻刀を一本見つけ、摘まみ上げて眺めているのに気づく。

男2 いや、はは。すいません。(彫刻刀をポケットに押し込みながら) 新しい先生に挨拶もろくにできなかつたもので。

女1 洋輔さんこそ、ついて早々大騒ぎになってしまつて。

男2 いえいえ、あらためて知子をよろしく願ひします。

女1 そうですね、無事だといひんですけど。

男2 昔のままですね。

女1 へ？

男2 この部屋です。

女1 ああ。文子先生がいるようですか？

男2 いや、大丈夫です。気持ちの整理もすっかりついていますので。だから、大丈夫です。

女1 ずいぶん悲しんでられたと聞きました。

男2 ぼくですか？いや、はは、あの時はそうですね。でももうだいぶ前の話ですから。

女1 それならよかつたです。

男2 さっきのあの酔っぱらつた老人たちは何ですか？

女1 あの人たちは、内山田さんのお知り合いの人たちのようです。

男2 ああ、へえ。

女1 別件で、その不審者を見つけるために集まつたみたいなんです、急遽知子ちゃんの捜索隊になつたようです。

男2 別件ってなんですか？

女1 はあまあ、なにかあつたそうです。その、よくは知りませんが。

男2 そうですか。

女1 驚いたでしょう？帰ってきたら朝から宴会をしていて。

男2 驚きました。まあ知子のこととはあれだけいたらすぐに見つかるでしょう。狭い島なので。

女1 そうですね、なんだか頼りになる方もいらつしやるらしいので。洋輔さんはいつまでいらつしやる予定ですか？

男2 一週間くらいですかね。あの、最後に知子を見たのは新しい先生だと聞きました。

女1 そうですね。その庭で穴を掘っていたのでその姿を見たのが最後です。

男2 穴？

女1 はい。幽霊を捕まえる落とし穴みたいです。

男2 幽霊？

女1 はい。

男2 なぜそんなものを？

女1 私が少しそんな話をしたので、穴を掘ってくれました。

男2 ははは、幽霊は穴に落ちるんですか？

女1 そういつてました。

男2 へえー。新しい先生は、その、知子がなくなった理由はお分かりですか？

女1 それがまるで分らないんですが、内山田さんの話だと知子ちゃんは時々おかしな行動に出るとかで、前にもあったそうですが。

男2 ああ、知ってます。前にも何度かあったと思います。一日中探し回って帰ったら文子先生とふたりで家にいたなんてこともありました。

女1 へえ。

男2 知子は文子先生のこととが本当に好きでしたからね。いつも文子先生の真似をして珈琲をゆっくり時間をかけて飲んでましたし、たばこ代わりに鉛筆をしょっちゅう啜えてましたし。だから文子先生に見つけてもらうために隠れていたのかもしれませんが。

女1 そうなんですか。

男2 優しい先生でした。知子にも、ぼくにも。正直に言うときだけ夢を見ていました。

女1 夢？

男2 文子先生が僕たちのお母さんになるんじゃないかなって。

女1 ああ。

男2 特に知子はほんとうにそう願っていました。父のことはご存じですよね？

女1 そうですね、あまり知っているわけではありませんが。

男2 あのとおり大金持ちで、いい加減な人間なので僕たちのような子供があちこちにたぐさんいるそうなんです。

女1 ぼくたちのようなとは？

男2 その、正式な子供じゃないというか。

女1 そうなんですか。

男2 文子先生も、父とそういう関係になることをおそらく願っていたんじゃないかと思っっています。ただ父がああ通りのいい加減な男なので、そうならなくてかえって良かったのかもしれません。あんなことになるとは思いませんでした。

女1 遺体も見つかってないそうですね。

男2 はい。だからお葬式もできなくて。(机のどこかを見て) これ読めますか？

女1 え？ああ、勉強、強、机？

男2 はい。ぼくが彫刻刀で彫りました。見つかったときはものすごく怒られました。

女1 へえ。

男2 いまかんがえると、これは父の用意した机なので傷をつけたくなかったんでしよう。でもぼくは見つからないようにほかに彫りました。(椅子を持ち上げ) これ。

女1 あ、勉強、椅子。

男2 これ。

女1 勉強、本棚。

男2 (床を指し)ここに勉強床。いつ気づくかなと思って怒られるのを楽しみにしていたんですが、どうだったんだろう。結局そのあと怒られることはありませんでした。

男1 カーテンレールとカーテンと道具をもって入ってくる。

男1 あ、洋輔くんもいましたか。すいませんいっぱい人が押しかけてきて。ひとまず今日は解散しました。みんな今日はもう眠いということ。

女1 ご苦労様でした。

男1 あとカーテンを用意しましたので、取り付けてもよいですか？

女1 あ、お願いします。

男1 しかしびっくりしました。鉄之助があんなに老け込んでしまっただけとは。むかしは大変頼りになるガッツマンだったんですが。どうも足を悪くしてから魂が抜けてしまったようで。相変わらず口だけは達者なんですが、かえって足手まといになりそうですね。しかも新しい先生を女中呼ばわりで。いやあ参りました。

女1 いや私は特に大丈夫ですよ。

男1 どうも久しぶりに集まったもので、つい朝から酒を飲むことになってしまいました。知子ちゃんですが、誰も見かけたものはいないということなので、北浦のほうまで範囲を広げようかという話をしております。ただあまり期待しないほうがいいかもしれません。すぐに飲み始める集まりになりそうです。

女1 そうですか。

男1 すいません

女1 見つかると思います。

男1 いかん、どうも手元が。

女1 大丈夫ですか。内山田さん、お酒も入ってますし、私のほうでやりますよ。

男1 ああ、洋輔くんに頼もうかな？

男2 え？ああ。いいですよ。

男1 わかる？

男2 わかります。

男1 あと今日は洋輔くんが帰ってきたので夜はオムライスにしようかなと思っていますがよいですか？

女1 お好きなんですか？

男1 好きなんですよ。

男2 もう好きではありません。

男1 そんなことないでしょう？

男2 いえ、もう好きではありません。
男1 またまた。学校の方はどうですか？
男2 版画で金賞をもらいました。
女1 すごい。
男1 はい。金賞ですか。
男2 金賞です。
男1 こんなものでいかがでしょう？
女1 ありがとうございます。
男1 カーテンというより、のれんですが。
女1 いえでも、あればずいぶん違いますので。
男1 じゃあとりあえずこれで。また黒い太った男が来ても、これがあれば大丈夫ですね。
女1 あ、実はそのことなんですが、その後は見なくなったので私の勘違いだったと思います。
男1 え？ほんとですか？
女1 たぶん、はい。
男1 でも最初の夜にははっきり見たんですよ。
女1 いやはっきりとは。
男1 そこまで太ってなかったということですか？
女1 あ、太さですか？そうですね。はい。
男1 ではやせた黒い男だったということですね。
女1 やせてたかな？
男1 少しやせてた？どちらかというをやせてた？ほんのちよつとやせてた？
女1 ほんの、ちよつとやせてました。
男1 ほんのちよつとやせてた。
女1 まちがいありません。
男1 わかりました。ほんのちよつとやせた黒い男ですね。明日みんなに報告しなさいといけません。任せてください。
女1 お願いします。
男2 (泣いている)
男1 あれ？どうした洋輔くん。
男2 (泣いている)
男1 洋輔くん？
女1 珈琲でもいれましょうか？
男2 え？
女1 飲みますか？
男1 ええ。

女1 洋輔くん、どうしますか？
男2 もうすこしここにいていいですか？
女1 もちろんかまいません。じゃあ私たちは向こうに行つてますので。
男2 すいません。
女1 珈琲こちらに持ってきますね。ゆっくり味わってください。
男2 ありがとうございます。
女1 内山田さん。行きましょう。
男1 あ、はい。

男1と女1、出ていき、ドアを閉める。男2、脚立の上で静かに泣いている。どこからか女3、手紙を手を持って出てくる。

女3 くら。
男2 え？
女3 なにしてる？
男2 勉強。
女3 なんの？
男2 なんのかな？先生、どこから入ってきた？
女3 どこからでも入ってくるよ。私の部屋だし。また彫ったな。
男2 気づいた？
女3 勉強窓。
男2 ほかにもあるよ。
女3 知ってる。勉強ベッド。
男2 うん。
女3 勉強柱。勉強時計。勉強ラジオ。勉強こけし。
男2 怒らんの？
女3 いいよ。
男3 なんで？
女3 どうせ見つからないから。理事長はたぶんここには来ないから。
男2 ああ。
女3 だからもう好きだけ彫っていいよ。
男2 ほんと？
女3 うん。四月まであと二か月ちょっとあるし。好きだけ彫りな。
男2 じゃあ新しいの買ってください。
女3 彫刻刀？
男2 うん、だいぶ切れが悪くなった。

女3 どれ？

男2 これ。

女2 じゃあまた来年の誕生日だな。(先の鈍った彫刻刀を受け取り、ペン立てに入れる)

男2 わかった。じゃあ来年の誕生日にはここに戻ってこないと。

女3 あと、彫るとき部屋の鍵かけるな。

男2 わかった。

女3 ずっと部屋に入れなかったから。知子ちゃんが。

男2 知子？

女3 ずっとノックしてたろ。

男2 ああ。

女3 長いこと部屋の前に立ってたよ。

男2 あれ、知子だったのか。

女3、壁際の机に座り手紙を開封し、読み始める。

女3 あ、自転車持っていく？

男2 下宿に？そうだな。持っていこうかな。

女3 どれ持っていく？

男2 新しいの買ってもらってもいいかな。

女3 この持って行ってよ。もう置いておくところないから。二つ三つ。

男2 捨てたらいいじゃん。

女3 それはできない。理事長が買った自転車だから一応。

男2 忘れてるよ。

女3 見て。

男2 ん？

女3 手紙来たよ。理事長から。

男2 なんの？

女3 感謝状。洋輔が学校行けるようになったから。入学式にはいくかもって。

男2 絶対来ないよ。

女3 私もそう思う。

男2 先生来てよ。

女1、珈琲を一つ持って入ってくる。

女1 あ、まただ。

女3 入学式？

男2 うん。入学式じゃなくてもいいけど。
女3 遠いからな。スーツ買わないとね。
男2 入学式の？
女3 そう。
男2 いらないよ。
女3 いるよ。
男2 専門学校だし。
女3 でも学校じゃん。

女1、女3のいる机の上に珈琲を置き、二人のやり取りを眺めている。

男2 ぼく一人だけスーツだったら恥ずかしいじゃん。
女2 みんなスーツだよ。
男2 そうかな。誰も来てないと思うな。
女3 スーツ着てるとこ見たいから行ってあげるよ。スーツじゃなかったら行かない。
男2 じゃあ、ブエノスアイレスだな。
女3 ブエノスアイレスかな。あんまり行きたくないけど。
男2 じゃあどうする？
女3 いいよ。ブエノスアイレスで。私が選んであげるよ。源太郎には選ばせない。せっかく似てるんだし。
男2 誰に？
女3 あんたのお父さん。
男2 似てるかな。
女3 そっくりよ。あんたはお父さんにそっくりで知子ちゃんはお母さんにそっくり。
男2 そうかな。
女3 殴りたくなるくらい。
男2 やめてくれ。

手紙を読み終えた女3、男2が自分を眺めていることに気づく。机の上の珈琲を飲みながら。

女3 なに？
男2 いや。

女3が珈琲を飲んだことを認めた後、女1は中央の机に座り、本(失われた時を求めて)

の続きを読み始める。

女3 時間あるんなら、旅行でもしたら？

男2 うん。まあ。お金ないし。スーツ買わないといかんし。

女2 ツケで買って、お父さんに払わせなさいよそんなもの。

男2 うんまあ。(黒板を見ている。)

女3 彫るのに忙しいか。

男2 彫るのはいいよ、彫刻刀ないし。それより絵の勉強しとく。

女3 まじめだ。

男2 先生モデルになってよ。

女3 モデル？

男2 絵の勉強するから。

女3 いいよ。

男2 じゃあ。

女3 今から？

男2 鍵かけてもいい？

女3 好きにして。

男1、女3を椅子に座らせて黒板に女3の写生を始める。女1は相変わらず本を読み続けている。どこからか床のきしむ音がする。

女1 知子ちゃん。

もういちどどこからか床のきしむ音がする。女1、立って窓際に行き外を見る。そのまま静かに後退し、しゃがみ、床の上に本(失われた時を求めて)を置く。しばらくしてベッドの下から、誰かの手が伸びてきてその本をつかもうとする。女1、それを躲してまた本を置く。伸びてきた手がかもうとつかもうとするが、そのたびに女1がそれを躲す。やがて手はふたたびベッドの下に消えていく。ベッドの下から笑い声が聞こえる。

女1 ふふふ。

笑い声は女2のもので、ベッドの下から顔を出す。

女2 ふふふふ。

女1 ふふふふ。

女2 あれ、なんでした？

女1 漢字？

女2 はい。

女1 ああ。でも、もういいよ。

女2 え？

女1 読まなくていいよ、あの本は。わからなくなるから。

女2 え？

女1 あの本の中にいるのか外にいるのかわからなくなるから。幽霊を落とし穴で捕まえようとしたのは知子ちゃんじゃなくて、あの本の中の女の子。

女2 え？

女1 そのあと屋根裏部屋に隠れてずっと見張ってたのもあの本の中の女の子。知子ちゃんじゃない。ここには寝たきりのおばあさんもない。内山田さんは執事じゃない。洋輔くんが入ったのも寄宿舎じゃないし、無理やり入れられてもない。ポケットに入っていたのは彫刻刀。鉄でできた武器じゃない。でもずっと読んでるとそれがわからなくなっちゃう。

女2 私じゃない。

女1 そう。

ベッドの下から出てきた女2が、女1が持っていた本を奪い、ページをめくりだすがやがて手が止まる。

女2 じゃあ私は。

女1 もう読まなくていいから。知子ちゃんは小説の中になくてもいいの。

女2 うん。

女1 うん。守ってあげるから。新しい先生が守ってあげるから。

女2 ほんとう？

女1 ほんとう。こんどこそほんとうの話。

女2 ありがとう、新しい先生。

女1 涼子。

女2 え？

女1 私の名前は涼子。涼子先生。

女2 ありがとう涼子先生。

4

黒板に「きょうていこうざ だい2回」と書いてある。カーテンが少し立派になっている。男1、男2中央の机に座っている。男2は以前、女2が書き写したノートを読んで

いる。

男2 この、①アタマというのはなんですか？

男1 ああ、①アタマね。それは基本中の基本ですよ。

男2 どういう意味ですか？

男1 意味っていうと、あれですけどね。

男2 あれとは？

男1 まあ、あとで先生に聞いてください。

男2 基本的なことなんですね。

男1 そうですね。あと地元の人はずまいですよ。

男2 地元？

男1 これも基本中の基本ですね。結構それなりの人も多いですからね地元には。だからまあ、地元の人がいればそれに賭ければまちがいないんですよ。

男2 それなりとはなんですか？

男1 それなりというのは、あれですよ。あのー、だからうまさのことですよ。地元だからよく知ってるんですね、いろいろ。これも大切なところ。

男2 結局地元かどうかが大切だってことですか？

男1 そこですね。地元の人はずぱりうまいですからね。

男2 うまいのはわかりました。

男1 わかった？

男2 わかりました。地元の人はずまいということですね。

男1 あ、淡水というのはわかりますか？

男2 淡水？

男1 淡水というのは、海の水じゃないほうの水ですよ。

男2 それはわかります。

男1 なんだ知ってましたか？

男2 淡水がどうかしたんですか？

男1 いやなんでもありません。あ、最初に競艇場に行ったときは大勝ちしますので、そのあとお寿司食べにいきます。三軒まわりますよ。

男2 三軒？お寿司屋さんでケンタッキーしかないじゃないですか？

男1 うん。

男2 ケンタッキーに三回行くんですか。

男1 行きますよ。昼、夜、えー、夜か、まあとにかく三回。

男2 お寿司苦手なんじゃなかったでしたっけ内山田さん？

男1 そうなんですよ。まあでもワサビを抜いてもらえば何とか。

男2 玉子に行けましたよね？

男1 玉子は行けますね。
男2 あと、ミートボールも。
男1 ミートボールも行けますね。ははは。
男2 ははは。
男1 あとはまあワサビを抜いてもらえば。でも皆さんの喜んだ顔がなによりのごちそうなので。
男2 え、内山田さんのおごりですか？
男1 いやそれはわかりませんが。

女2 入ってくる。

女2 お、揃ってますね。
男1 遅いですよ。二時から講座の約束ですよ。
女2 すいません。
男1 すでに予習復習はばっちりですよ。
男2 ばっちりではないけど。

男2 が自分の席に座って自分のノートを読んでいるのに気づいた女2、男2とノートの奪い合いをした果てに、ノートと席を勝ち取る。

男2 (席を取られ) がっでむ。
女2 なんか採寸に時間がかかってしまっで。
男1 知子ちゃんのこと？
女2 いえ、涼子先生の。
男1 ああ、それは必要以上にやるでしょうね。
男2 まちがいなく、やるでしょうね。
男1 時間をかけてね。
男2 かけるでしょうね。

女2 が鉛筆を取りに席を立って奥の机に向かった隙にふたたび、男2が席を奪い返す。

女2 がっでむ。待ちきれないので先に帰ってきました。
男2 え、まだやってるの？
女2 どうだろう。
男1 あいつは職人中の職人ですからね。念入りにやるでしょうね。初めての採寸ですし。
男2 時間をかけてね。

男1 かけるでしょうね。
男2 そうしてこれからも。
男1 もちろん何度でも。
男2 行くとたびに採寸。採寸地獄。
男1 うん。

付け替えたカーテンが気になり男1が席を立った際に、女2に席を奪われるが気が付かない。

男2 (男1に小声で) がっでむ。
女2 私はしてもらってないです。
男1 そんなことないでしょう。
女2 でも十年くらい前に一度だけ。
男1 ああ。
男2 (男1に小声で) がっでむ。
女2 源太郎さんにお勧めされる服いつも小さいし。
男1 まあそれは、うん。ね？
女2 え？
男1 知子ちゃんはしょうがないですよ。やっぱり先生のほうは理事長が選んだ人ですか
らね。見た目もそれなりということなんでしょう。
女2 それなり？
男2 ちょっとトイレに。(席を立つ)
女2 おい。
男1 (カーテンの確認を終えて、空いた席に戻ってくる) それにしても遅いですね。
女2 で、それなりとはなんですか？
男1 それなりというのは、あれですよ。あのー、

終わり

引用参照

失われた時を求めて 1〜第一篇「スワン家のほうへI」 (光文社古典新訳文庫)
プルースト(著)、高遠弘美(翻訳)

競艇五点買い

